

『新しい人生が開かれ』 ヨハネの福音書 1章 35~42節

1. 弟子となるとは

本日の 35 節以下には、主イエス・キリストの最初の弟子となった人々のことが語られています。二人の人がここで、イエス様の弟子、つまりイエス様に従って行く者となったのです。他の三つの福音書には、ガリラヤ湖の湖畔で二人の漁師たちにイエス様が「わたしについて来なさい」と声をかけ、彼らが従ったという話が語られていますが、ヨハネの福音書はそれとは全く違う仕方で、最初の弟子の誕生を語っているのです。また他の福音書では、最初に弟子となったのはペテロとアンデレの兄弟だったとされていますが、ヨハネにおいては、アンデレは共通していますが、もう一人はペテロではなくて名前の分からない人です。ペテロはその後アンデレによってイエス様のもとに連れて来られて弟子となったのです。このようにヨハネの福音書と他の福音書とでは語られていることが違っているわけですが、それを矛盾であるとかどちらが正しいのかと考える必要はありません。ヨハネの福音書は、歴史的事実を描くと言うよりも、出来事の根本にある意味を象徴的に語る、という手法で書かれています。ですから本日の箇所においてもヨハネの福音書は、イエス様の弟子となるとはどういうことなのか、そこで私たちに何が起るのかを語っているのです。ですからここに語られていることを、私たち自身の事柄として読むことが求められているのです。

36 節に、ヨハネが「そしてイエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の子羊」と言った。」とあります。29 節には「その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。」とありました。いずれにおいても、ヨハネがイエス様を見て「この人は神の小羊だ」と語ったのです。37 節には「二人の弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。」とあります。ヨハネがイエス様のことを「神の子羊」と語ったのを聞いて、二人の人がイエス様の弟子となったのです。この二人は、35 節に「その翌日、ヨハネは再び二人の弟子とともに立っていた。」と語られているように、元々はバプテスマのヨハネの弟子であり、彼のもとにいた人たちです。ヨハネの弟子だったこの二人が、ヨハネ自身の「見よ、神の子羊」という言葉を聞いて、イエス様に従う者、イエス様の弟子となったのです。このことは、当時実際に起っていたことでしょう。つまり、イエス様より先にバプテスマのヨハネが現れて、悔い改めのしるしとしての洗礼を授けていました。そのヨハネのもとに集まった人々がヨハネの弟子となったのです。しかしそこは、自分の後に現れる救い主の備えをすることを自らの使命としていました。だから彼はイエス様と出会うと、「見よ、世の罪を取り除く神の子羊。」と語ったのです。つまりヨハネは自分の元に集まって来た人々にイエス様を指し示し、人々がイエス様の弟子となることをこそ願っていたのです。実際そのようにして元々はヨハネの弟子だった人たちがイエス様に従って行くようになったのです。

しかし、ヨハネの福音書はこのことに象徴的な意味を見つめています。私たちも、元々イエス様の弟子だったわけではありません。何か別のものを信じていたり、依頼んでいたのです。別の神を信じ、別の宗教の信者だったということではなくても、人生において頼りにしていたもの、これこそが大切だと思っていたものがいろいろあったのです。しかしある時私たちは、「イエス・キリストこそ神の子であり、私たちの罪を取り除き、赦して下さる救い主だ」と語る誰かの言葉を聞きます。教会の礼拝において、牧師が説教でそれを語るのを聞くという場合が一番多いかもしれません。あるいは教会へと誘ってくれた知り合いの信仰者から、「イエス様こそ救い主だ」と聞くこともあるでしょう。イエス様のことを語る誰かの言葉を聞くことを通して、私たちはイエス様を知るようになり、信じるようになるのです。最初の弟子たちも、バプテスマのヨハネの言葉によってイエス様を知り、従う者となった。ヨハネの福音書はこの場面において、イエス様の弟子となることにおいて私たちに起ることを見つめ、描いているのです。

2. 信仰の告白が証し

ヨハネは自分の弟子たちにイエス様のことを指し示し、「見よ、神の子羊」と言いました。このようにイエス様を指し示して語られる言葉を「証し」と言います。イエス様を「証し」することこそがヨハネの使命であり、彼はそのため

にこの世に生まれたのだ、ということが、これまでに読んできた1章前半に語られていました。そのヨハネの「証し」によって、イエス様に従って行く弟子が生まれたのです。ヨハネはイエス様を見つめつつ、「見よ、神の子羊」という「証し」を語りました。29節と36節にその言葉が記されています。しかし29節と36節では、語られた情況が少し違います。29節は、「**その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て**」だったのに対して、36節は「**そしてイエスが歩いて行かれるのを見て**」となっています。この違いにも象徴的な意味があります。「**自分の方にイエスが来られるのを見て**」というのは、まさにイエス様が自分の方に向かって来られる、自分と出会おうとしておられる、そのようなイエス様との出会いにおいて、ということです。そこで語られた「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」という言葉は、ヨハネのイエス様に対する信仰告白、「あなたこそ神の子、救い主であると信じます」という信仰の表明でもあります。そういう信仰の告白が、周囲の人たちに対してはイエス様を「証し」する言葉となった、ということが29節以下には語られていたのです。

それに対して36節では、「**イエスが歩いて行かれるのを見て**」となっています。その「歩く」という言葉は、その人の言葉や行動の全て、つまり「生き方」を意味していると言えるでしょう。イエス様の歩みを見つめてヨハネは「見よ、神の子羊」と言ったのです。それはイエス様に対する信仰の告白と言うよりも、この場合には自分のもとにいる弟子たちに対してイエス様のことを「証し」する言葉です。その「証し」を聞いて、ヨハネの弟子であった人たちが、イエス様に従う者、イエス様を信じる信仰者となったのです。

ヨハネが「見よ、神の子羊」と言うのを聞いただけでどうして彼らはイエス様に従っていくことができたのだろうか、という疑問もここでは必要ありません。ヨハネの福音書は、私たちがイエス様に従う信仰者となるのは、「イエス様こそ救い主だ」という「証し」の言葉を聞くことによってこそ起るのだ、ということを語っているのです。

3. 何を求めているのか

そこにおいてむしろ見つめるべきことは38節の「**イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」**」ということです。イエス様を「証し」する言葉を聞いて、イエス様に従って行こうとする者に、イエス様は「**何を求めているのですか**」とお尋ねになるのです。私たちもこの問い合わせます。イエス様を信じて生きていくことを多少なりとも考え始めると、「自分はイエス様に何を求めているのだろうか」、「何を得たいと願ってイエス様のもとに来ているのだろうか」という問い合わせが生じるのです。最初のうちは、病気の苦しみから救われたいとか、あの悩み、この苦しみを解決してほしい、ということを願って教会に来るかもしれません。しかし通っているうちに気づくことは、そういう悩みや苦しみに対する直接の解決が与えられるわけではない、ということです。信じたから病気が治るわけではないし、人間関係が急に改善されるわけでもない、教会というものはそういう直接のご利益を与えてくれる所ではないことが分かってくるのです。その時に、だったらもう来ても仕方がないと思ってやめてしまうのか、それとも、自分が最初に求めていたのとは違うけれども、何かもっと大切なものがここで与えられるのではないかと感じて、それが何なのかを求めていこうとするのか、そこに、信仰に至るかどうかの分かれ道があります。自分は何を求めてイエス様のところに来ているのか、イエス様が自分に与えようとしておられる救いとは何なのか、そういう問い合わせ抱くことにおいて私たちは既に信仰への最初の一歩を踏み出しているのです。

「**何を求めているのですか**」というイエス様の問い合わせを受けた彼らは、「**ラビ(訳すと、先生)、どこにお泊まりですか。**」と尋ねました。「**ラビ**」とはここに記されているように「**先生**」という意味であり、ユダヤ人の間で、神から与えられた律法を人々に教え、律法に基づく生活のあり方を教えていた人々、つまり宗教的指導者を指す言葉です。彼らは、それまで師と仰いでいたヨハネが「見よ、神の子羊」と指し示したイエス様が、神の御心に従う信心深い生活のあり方を教えてくれるヨハネ以上の先生であると思ってそのように呼びかけたのです。

彼らがイエス様に尋ねたのは「**どこにお泊まりですか**」ということでした。宿泊場所を尋ねてどうする、もうちょっと気の利いた質問はないものか、と私たちは思います。しかしこの「泊まる」という言葉はヨハネの福音書においてとても重要な意味のある、また繰り返し出て来る大事な言葉なのです。この言葉は「泊まる」の他に、「つながる、

留まる」と訳すことができます。それが出て来るよく知られた箇所は、15章です。その5節には、「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。」といいうイエス様の御言葉があります。そこに、「人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」とあります。その「とどまっている」がこの「泊まる」という言葉なのです。さらに15章10節には「わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。」とあります。このようにこの「泊まる」は、イエス様が父なる神の愛の内にとどまつており、私たちがイエス様につながっており、その愛の内にとどまっているという、私たちとイエス様、そしてイエス様と父なる神の関係を言い表す大事な言葉なのです。ですから「どこにお泊まりですか」という問いは、宿泊場所を尋ねているというよりも、イエス様が父なる神との関係において、また私たちとの関係において、どこにとどまつておられるのか、神と私たちとの間でどのような働きをなさるのか、ということを尋ねる象徴的な問いなのです。

イエス様を「証し」する言葉を聞いて、自分も信仰をもつて生きて行こうとする時に私たちは、イエス様から「何を求めているのですか」という問い合わせを受けます。自分がイエス様に本当に求めていることは何なのかが、私たちはなかなか分かりません。しかし私たちが根本的に求めているのはこのことなのではないでしょうか。つまりイエス様は父なる神と私たちとの間でどこにとどまつておられるのか、どのような働きをしておられるのか、要するにイエス様は私たちにとってどのような救い主であられるのか、ということです。イエス様を信じる信仰者となる上で避けて通ることのできないこの根本的な問いを、「どこにお泊まりですか」という問いは象徴的に表しているのです。

そしてこの問い合わせに対してイエス様は「来なさい。そうすれば分かります。」とおっしゃいました。これは直訳すれば「来なさい、そして見なさい」となります。私が父なる神との関係において、またあなたがたとの関係において「どこにとどまっているのか」、「何をしているのか」、つまり私はどのような救い主であるのか、そのことは、私のもとに来れば分かる、だから私のもとに来なさい、そして私の歩みをよく見なさい、とイエス様はおっしゃるのです。それは私たち対しても語られている御言葉です。イエス様は私たちに、「わたしのところに来なさい、そしてあなた自身の目でよく見なさい、そうすればわたしのことが分かる」と言っておられる、つまり私たちをご自分のもとへと招いておられるのです。

このイエス様の御言葉を受けて彼らは、「そこで、彼らはついて行って、イエスが泊まっておられるところを見た。そしてその日、イエスのもとにとどまつた。時はおよそ第十の時であった。」のです。イエス様について行って、どこにイエス様が泊まっておられるかを見る、私たちに求められているのもそのことです。イエス様に従つて行くとか、弟子つまり信仰者となって生涯を生きて行くというようなことは、最初からそういう決心をして歩み出すようなことはありません。さらにそれは、私たちの決心や決断によって実現するようなことでもないのです。私たちは、イエス様から「来なさい。そうすれば分かります。」と語り掛けられて、イエス様のあとについて行って見るので。そしてそこでイエス様の歩みを見、御言葉を聞くのです。そのことの中で、「イエスのもとにとどまつた」ということが起つていきます。ぶどうの木であるイエス様に私たちがつながつて豊かな実を実らせていくことが、またイエス様の愛の内にとどまり、神の愛を受けて生きることが起つのです。それは私たちが自分の決心や努力によって実現することではなくて、私たちをご自分のもとに招いて下さったイエス様の恵みによって与えられていくことなのです。

4. 新しい人生が開かれていく

こうしてイエス様のもとに泊まつた二人の内の一人であるアンデレは、おそらく翌日、自分の兄弟であるシモン・ペテロに会つて、「**私たちはメシア(訳すと、キリスト)に会つた**」と言いました。メシアとはヘブル語で、意味は「油を注がれた者」という言葉です。「油を注がれる」とは、神によって大事な務めに任命されるということであり、この場合には、救い主として立てられることを意味しています。「**私たちはメシア(訳すと、キリスト)に会つた**」とは、「救い主に出会つた」ということなのです。アンデレは、救い主であるイエス様と出会つた自分の体験を兄弟ペテロに語りました。それは、ヨハネがその弟子たちに、イエス様を指して「見よ、神の子羊」と語つたのと同じ「証し」の言葉

です。ヨハネの「証し」を聞いてイエス様のもとに行き、イエス様のもとにとどまる者となったアンデレが、今度は自分の身近な人にイエス様を証しする者となったのです。

そして「**彼はシモンをイエスのもとに連れて來た。**」と 42 節にあります。これらも、私たち自身に起ることです。誰かの「証し」を聞いて主イエスのもとに来て見ることによって、私たち自身がイエス様につながり、そのもとにとどまる者となる、つまり信仰者となる、そしてその私たちが今度は、誰かにイエス様を「証し」し、人をイエス様のもとに連れて來る者となるのです。イエスこそ救い主だと私たちが語ることを通して、イエス様のもとに來る人が新しく興されていくのです。イエス様を信じる信仰はこのようにして世界中に広まっていったのです。一人の人の「証し」によって一人の人が新たにイエス様のもとに連れて來られる、これが伝道の基本です。

アンデレの「証し」によって、その兄弟シモン・ペテロがイエス様のもとに連れて來られました。42 節後半には「**イエスはシモンを見つめて言られた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたはケファ(言い換えれば、ペテロ)と呼ばれます。」**」とあります。シモン・ペテロにイエス様が「ケファ」という新しい名を与えた、と言われているわけですが、他の福音書には、イエス様がシモンに与えた名前はペテロだったと語られています。しかしひテロも「ケファ」もその意味は「岩」です。

マタイの福音書 16 章 15~19 節には、「**イエスは彼らに言られた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」シモン・ペテロが答えた。「あなたは生ける神の子キリストです。」**すると、イエスは彼に答えられた。「バルヨナ・シモン、あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です。そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつながれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」」と語られています。イエス様がシモン・ペテロを教会の土台としてお立てになることが、本日の箇所においても意識されているのは確かでしょう。十二人の弟子たちの筆頭となるシモン・ペテロはこうしてイエス様の弟子となったのです。

しかし本日の箇所において見つめるべき大事なことは、アンデレが連れて來たペテロを、イエス様が既にご存知であり、彼に新しい名前をお与えになったということです。それは、イエス様とペテロの間には以前から面識があったということではありません。これもまた、イエス様との出会いにおいて私たちが体験することなのです。私たちも、誰かの「証し」を聞き、誰かに連れられてイエス様のもとに来ます。そこで初めてイエス様と出会うのですが、しかしそこで私たちが示されるのは、イエス様が既に自分のことを知っておられ、待っておられたということです。私たちの方は初対面だと思っているのに、イエス様は、「私はあなたのことを生まれる前から知っており、見つめており、あなたを待っていた」とおっしゃるのです。イエス様と出会う時に私たちは、自分がイエス様のことを全く知らなかった時から、イエス様が自分のことを知っておられ、いつも見つめておられ、待っておられたのだということに気づかされるのです。

そしてイエス様は、ペテロに新しい名前をお与えになりました。それは彼を生まれ変わらせ、新しい人生を与えて下さったということです。ペテロは、イエス様と出会い、弟子となって、それまでとは全く違う新しい人生を歩んでいたのです。私たちも、イエス様と出会うことによって新しく生まれ変わり、新しい人生を生きる者とされます。洗礼を受けるとはそういうことです。イエス様は、私たちの全ての罪を背負って十字架にかかるて死んで下さいました。そして復活して、新しい命、永遠の命を生きておられます。洗礼によって私たちはこのイエス様につながり、そのぶどうの木の枝となり、イエス様の愛の内にとどまって生きる者となるのです。

イエス様が自分のことを知っていて下さり、招いて下さって、新しく生まれ変わらせ、イエス様につながって生きる者として下さった、信仰者はその恵みを味わいつつ生きるのです。誰かの「証し」を聞いてイエス様のもとに来て見ることから、そのような新しい人生が開かれていくのです。